

genius  
今月のGな人

松下電器産業株式会社  
商品技術グループ グループマネージャー  
楠見 雄規さん



## 放送のデジタル化により、 超高画質映像が氾濫する時代へ。 そのとき、家電に何が起きていくのか。

放送のデジタル化は、コンテンツマネジメントを大きく変えるだけでなく、高画質映像がより日常化することによる様々な変化をもたらす。画像容量はますます大きくなり、それを記録するためには巨大な容量をもつハードが必要になる—そうすると、AV家電にどんな変化が起きていくのか。また、以前から叫ばれている《AV家電とインターネットとの連携》は、いまだお茶の間レベルまで浸透していないが、今後どのような展開が待っているのか。BML (Broadcast Markup Language)の策定に深く関わり、デジタルテレビやブルーレイ、DVDレコーダーなどを通じて日本の家電技術開発をリードするキーパーソン、松下電器産業株式会社・楠見雄規さんに、お話をうかがってみました。

—楠見さんはブルーレイ事業にも深く関わっていたと伺っていますが、今後は、やはりブルーレイが記録メディアの主流になっていくのでしょうか。

間違いなく、そうですね。2011年の地上波全放送デジタル化に向けて、いま、ハードもソフトもどんどん切り替わっていますよね。デジタル化がもたらす大きな変化として、〈ハイビジョン映像〉と〈サラウンド音響〉があります。体験すれば一目瞭然ですが、これはもういままでのテレビ映像から比べて圧倒的なクオリティですので、いちど触れてしまうともう戻りにはできないでしょう。とりわけ日本のデジタル放送は、海外のそれに比べて広帯域ですから、よりハイクオリティなコンテンツを提供できます。そうすると、必然的にそういうコンテンツを「録って残したい」という消費者の欲求が生まれてきます。しかも、映画や芸術映像等、「残したい」映像ほど大容量であるわけで、現在のHDやDVDの容量ではとても無理。ブルーレイ主流の時代がすぐにはやってくることは確実です。ハイビジョン&サラウンド映像の場合、1時間で約10GBと計算すると、通常の映画1本がほしい2時間ですから20GB必要です。さらに、『アラビアのロレンス』や『ロード・オブ・ザ・リング』のような3時間半から4時間を越える大作になると、1枚50GBの2層ブルーレイの出番になります。

—デジタル化によって、家庭でも映画館並みの高画質&高音質な映像が手軽に見られるようになる。ただ一方で、生活者には1日24時間という限られた時間しかないなか、「録画して見る」頻度は、今よりも増えるのでしょうか？

いい質問ですね。確かに、1コンテンツあたりの容量が大きくなったとしても、「録画して見る」という行為がそんなに増えないのであれば、ブルーレイというメディアの存在意義はその分小さくなってしまいかもしれません。そこで、カギを握るのが、例えば御社が提供している『Gガイド』や『Gガイドモバイル』のようなツールの役割だと考えています。お世辞をいうつもりはないのですが、『Gガイドモバイル』の(リモート録画予約機能)は非常に便利です。ちょっとした待ち時間とか、電車の中で、テレビ番組表を見て「あ、これ録っておきたい」と思ったらその場で録画予約できるわけで。録りたい番組を逃さないように、忙しい生活者にとって時間を有効に使ってもらえる

という点でも、録画機にとって大変有意義なツールです。何を隠そう、私も『Gガイドモバイル』のヘビーユーザーなのですが(笑)。

—ありがとうございます。私たちにとって常に課題として考えているのが、よりカンタンでより便利なツールを開発する一方で、それを使ってもらうためにはどうすればいいか、ということです。その点について楠見さんはどのように考えていらっしゃいますか？

私たちの課題も同様ですね。この問題は、〈コンテンツ〉と表裏一体であると考えています。どんなにカンタンで便利なハードが出来ても、それによって享受できるコンテンツが魅力的でなければ使ってもらえません。逆に、多少使うのに面倒で複雑なハードであってもそれによって享受できるコンテンツが魅力的であれば、使ってもらえたりします。「にわとりが先か、卵が先か」ということになりますが、私たちメーカーとしては、デジタル化によって非常に魅力的なコンテンツが創出されたときに、それを楽しめるハード環境を「常に先行して」作りつづけることが使命だと思っています。平たく言えば、いつも一歩先のコンテンツを見ずえていなくては行けないわけで、だからこそ、プラズマテレビやブルーレイに注力しているのです。



Panasonic  
「HDD搭載ハイビジョンBDレコーダーブルーレイディスクレコーダー」(DMR-BW200)

—インターネットとテレビおよびテレビ周辺機器の関係は、今後どのような展開になるのでしょうか。

日本は、韓国と並んで、世界有数の高速インターネット大国になりつつあります。したがって、「インターネットコンテンツのハイビジョン化」という時代が近いうちに確実にやってくるでしょう。そうすると、まず起きる欲求が「十数インチのPC画面ではなく、高画質大画面モニターでそれを見たい」という欲求だと思います。その欲求に応えるために、プラズマ大画面のテレビとインターネットが繋がっていることが前提になります。そして、「それを保存したい」

という次の欲求に応えるために、大容量録画メディアとインターネットとが繋がっていかなくては行けません。

—《リビング家電と通信の連携》ですね。

そうですね。何年も前から言われていたことですが、現状、なかなか進んでいません。それは、コンテンツ側の問題が大きいかと思います。インターネットコンテンツのハイビジョン化が起きたとき、生活者は否応なく「それを大画面テレビで見たい」「記録メディアに残したい」と思うわけで、そうすれば、必然的にハード環境も変化していくでしょう。ましてや、インターネットは、コンテンツスペースが〈有限〉であるテレビ放送と違って、スペースが〈無限〉ですから、そこでハイビジョン化が起きたときには、その受け皿としての大容量記録メディアは不可欠になります。

—本日は、お忙しいところありがとうございました。

## 今月のGワード groovy word

### HDMI

High-Definition Multimedia Interface

Silicon Image社を中心に、松下電器産業、日立製作所、Philips、ソニー、Thomson Multimedia社、東芝が共同で策定したパソコンとディスプレイの接続に使われるデジタルインターフェース(接続規格)。従来のDVI (Digital Visual Interface) に対して、音声伝送機能や著作権保護機能、色差伝送機能を加えるなどAV家電向けにアレンジし発展させたもの。映像・音声・制御信号をシングルケーブルに一体化し、加えて、映像と音声を高品位なデジタル信号でやり取りできる。複数の映像ケーブルや音声ケーブルを必要とする従来のアナログ方式に比べ、接続がシンプルで簡単というメリットがあるうえ、やり取りできる映像や音声の品質が高く、伝送中の劣化もほとんどない。ブルーレイをはじめとする次世代録画メディアプレーヤーをプラズマテレビ等の高性能モニターへ接続する場合には、この〈HDMI〉が主流となる。

# Data Watching



ブルーレイは、なぜ大容量記録が可能なのか

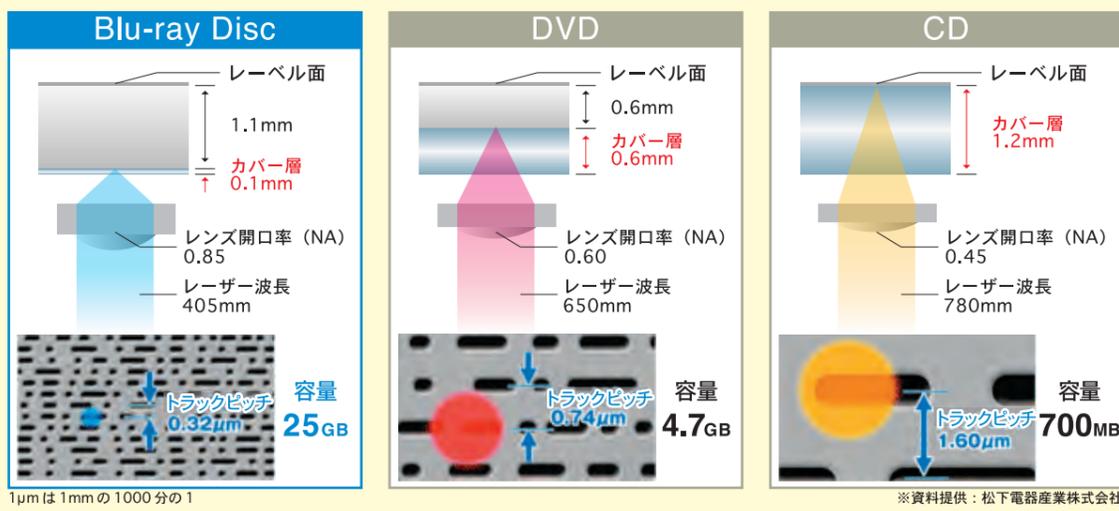
1面あたりの容量が4.7GBのDVDに対し、ブルーレイDiscの1面あたりの容量は25GB。見た目はCDやDVDと同じ直径12cm・厚さ1.2mmのディスクなのに、なぜ、これほどの大容量が実現できたのか。ちょっと専門的な話になりますが、その謎に迫ってみました。

ブルーレイが大容量を実現したポイントは、大きく3つあります。

1. 青色レーザー光
2. 開口率 (NA) の大きな対物レンズ
3. 極薄カバー層

ディスクに情報を記録・再生するにはレーザー光を使います。赤色レーザー光よりも波長が短くディス

ク上でスポットが小さい「青色レーザー光」を使用したことから、「ブルーレイ」の名がつけました。これに、開口率 (Numerical Aperture、レンズの集束能力のこと) の大きな対物レンズを組み合わせることで、ディスク上でさらに小さなスポットに絞り込むことができ、それだけ高密度に情報を記録することが可能になったのです。下図、青、赤、黄の円が、各ディスク上に絞り込まれた「レーザー光」のスポットの大きさを示しています。大容量化を実現したもうひとつの技術が、カバー層の薄型化。ディスクの記録面には、キズやホコリから守るため保護膜 (= カバー層) を施してあります。光ディスクはプラスチック製なので、一定の反りが生じます。この反りが、絞り込まれたレーザー光のスポットが歪め、安定した記録・再生ができなくなります。しかも、レンズのNAが大きいほど、ディスクの反りに対してスポットの歪みが大きくなるため、この歪みを解決するには、カバー層をより薄くする必要があります。樹脂のスピンコートによる0.1mmカバー層の製造を実現したことにより、この問題を解決することができました。



# いちばん思い出に残っている テレビ番組

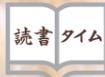
Vol.13

「スクール☆ウォーズ ～泣き虫先生の7年戦争～」

小学生の頃、少年野球ならぬ「少年ラグビー」のクラブチームに入っていました。珍しいスポーツだったため、低学年の頃は地味にやっていたのですが、小学校5年生の時に『スクール☆ウォーズ ～泣き虫先生の7年戦争～』が放送されるや否や、あれよあれよとラグビー人気が高まり、いつの間にか自分ではまったく理解できないほどクラスの人気者になってしまいました。当時は手放して浮かれていましたが、後になって「テレビって、とっても興味深い (ちょっと怖い) メディアだな～」と感じました。『機動戦士ガンダム』が流行ったときはクラスみんなでプラモデル (ガンプラ) 作りに没頭しましたし、『キン肉マン』が流行ったときはみんなで「キン肉マン消しゴム」を争うように集めて、トレードしたりしていました。『キャプテン翼』が流行ったときには、昼休みや放課後の遊びがドッチボールからサッカーに変わりました。・・・当時のテレビって、日常会話の「ネタ」を提供してくれるだけでなく、身近な人の「気持ち」や「態度」まで変えてしまうほど、もの凄い影響力を持っていたよね。



株式会社電通  
メディア・コンテンツ計画局 計画部  
アソシエイト・スーパーバイザー  
和崎 祐貴



## 犬と笛 (二)

芥川龍之介

それから四五日たったある日のことです。髪長彦は三匹の犬をつれて、葛城山の麓にある、路が三叉になった往来へ、笛を吹きながら来かかりますと、右と左と両方の路から、弓矢に身をかためた、二人の年若な侍が、遅い馬に跨って、しずしずこっちへやってきました。

髪長彦はそれを見ると、吹いていた笛を腰へさして、叮嚀におじぎをしながら、「もし、もし、殿様、あなた方は一体、どちらへいらっしゃるのぞございます。」と尋ねました。

すると二人の侍が、交る交る答えますには、「今度飛鳥の大臣様の御姫様が御二方、どうやら鬼神のたぐいにでもさらわれたと見えて、一晩の中に御行方が知れなくなった。」

「大臣様は大そうな御心配で、誰でも御姫様を探し出して来たものには、厚い御褒美を下さると云う仰せだから、それで我々二人も、御行方を尋ねて歩いているのだ。」

こう云って二人の侍は、女のような木樵と三匹の犬とをさも莫迦にしたように見下しながら、途を急いで行ってしまいました。

髪長彦は好い事を聞いたと思いましたから、早速白犬の頭を撫でて、「嗅げ。嗅げ。御姫様たちの御行方を嗅ぎ出せ。」と云いました。

すると白犬は、折から吹いて来た風に向って、しきりに鼻をひこつかせていましたが、たちまち身ぶるいを一つするが早いかな、

「わん、わん、御姉様の御姫様は、生駒山の洞穴に住んでいる食蜃人の虜になっています。」と答えました。食蜃人と云うのは、昔八岐の大蛇を飼っていた、途方もない悪者なのです。

そこで木樵はすぐ白犬と斑犬とを、両方の側にかかえたまま、黒犬の背中に跨って、大きな声でこう云いつけました。

「飛べ。飛べ。生駒山の洞穴に住んでいる食蜃人の所へ飛んで行け。」

その言が終らない中です。恐しいつむじ風が、髪長彦の足の下から吹き起ったと思えますと、まるで一ひらの木の葉のように、見る見る黒犬は空へ舞い上って、青雲の向うにかくれている、遠い生駒山の峰の方へ、真一文字に飛び始めました。

※次回 (三)



こんにちは。IPGで主に広告素材の制作および入稿・進行業務をさせて頂いております、増井と申します。容量等に制約がある中で関係各所へはお手数をお掛けしてしまっているかもしれませんが (申し訳ありません・・・)、その分、いやそれ以上の愛情を素材に込めていく所存です—あ、あまり重く受け止めないで下さい・・・Gガイドを見るときに、そこに多くの人関わっている事を心の片隅にでも留めていただければ幸いです。今後とも何卒、何卒宜しくお願い致します。あまりまとまりのない文面で申し訳ありません。。。



営業企画ユニット 増井 真琴